

令和 7 (2025) 年度

教職課程

自己点検評価報告書

富山国際大学子ども育成学部

令和 8 (2026) 年 3 月

## 富山国際大学 教職課程認定学部・学科(免許校種)

子ども育成学部子ども育成学科(幼・小)

### 全体評価

富山国際大学は、母体である富山国際学園の「高い知性と広い教養、健全にして豊かな個性」を建学の精神とし、「共存・共生の精神と知性を磨く教育を基本に、時代の潮流に対応できる健全にして個性豊かな人材を育成して、国際社会及び地域社会の発展に寄与する」ことを基本理念に掲げている。本学では、現代社会学部現代社会学科と、子ども育成学部子ども育成学科の2学部2学科を設置し、特に子ども育成学部子ども育成学科には教職課程を置き、幼稚園教諭一種免許状、小学校教諭一種免許状について課程認定を受けている。

子ども育成学部においては、教育・保育・福祉など子ども育成に関わる幅広い領域を対象に、基礎的・専門的・実践的教育研究を行うことを教育目的とし、子どもを連続した発達主体として捉える時間軸と子どもを家庭や地域社会との関連性の中で捉える空間軸から学びを構築し、「主体的に生きるための幅広い知識と教養、子ども育成の専門家としての確かな資質能力と学びの精神をもった人材の育成」を教育目標として、これまで14年間、富山県内を中心に教育・保育・福祉、その他、地域に貢献する多くの人材を輩出してきた。

本学の教職課程委員会は、教育職員免許状取得に必要な教職課程の運営やカリキュラムについて審議し、履修指導や単位認定が円滑に行われるよう体制を整えている。子ども育成学部では、教育の質保証とさらなる向上を目指して毎年度PDCAサイクルを確実に回し、その成果と課題を検証している。教職課程委員会で審議された事項は両学部合同教授会に報告され、学務課(教務担当)と緊密に連携しながら、教職課程のカリキュラム改善に向けた不断の努力を続けている。

本学における教職課程は、学生にとって重要なキャリア選択の場であると同時に、地域社会にとっても未来を担う人材を育てる重要な基盤となっている。高い知性と広い教養、健全で豊かな個性を備えた人材を社会に送り出してきたことは、持続可能な地域社会の形成に確かな貢献を果たしており、本学としても自負しているところである。

今後も本学は、教職課程における教育の質保証と向上に不断に取り組み、学生と教職員が一体となって学びを深め、新たな時代を切り開く叡智を創造できる大学を求め続けたい。

富山国際大学子ども育成学部

学部長 三原 茂

## 目次

I 教職課程の現況及び特色	1
II 基準領域ごとの教職課程自己点検・評価	2
基準領域1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく	
協働的な取り組み	2
基準領域2 学生の確保・育成・キャリア支援	4
基準領域3 適切な教職課程カリキュラム	7
III 総合評価(全体を通じた自己評価)	11
IV 「教職課程自己点検・評価報告書」作成プロセス	12

## I 教職課程の現況及び特色

### 1. 現況

- (1) 大学・学部名：富山国際大学子ども育成学部  
 (2) 所在地：富山県富山市願海寺水口 444  
 (3) 教職課程の履修者数及び教員数

令和7年度(令和7年5月1日現在)

学部・学科	免許種	教職課程履修者数	教職課程専任教員数
子ども育成学部	幼1種	4年生 50名	幼稚園教員養成課程 14名
子ども育成学科	小1種	4年生 52名	小学校教員養成課程 15名

※複数の教員養成課程の履修可

	教授	准教授	講師
教員数	9名	4名	5名
備考：キャリア支援センター参事 1名(非常勤)			

### (4) 卒業者の現況

令和6年度卒業者(令和7年5月1日現在)

免許種	認定こども園		幼稚園		小学校	
	正規	他	正規	他	正規	他
	11	0	0	0	38	11

### 2. 特色

子ども育成学部では、教育・保育・福祉の3分野を幅広く学ぶことができる特色を生かした教育課程を編成し、地域に貢献できる人材を育成している。なお、卒業認定、学位授与に関する方針に明記された人間性、専門性、社会性を高めるために、教育・保育・福祉の3分野を幅広く学ぶことができるように以下の三つの特色をもった教育課程を編成している。①子どもの育ちとその環境を一体的に捉える、②少人数できめの細かい実践的専門教育を推進する、③「地域で学ぶ」「地域に学ぶ」「地域で育つ」ことを重視する。授業科目は、教養科目と専門科目に大別され、体系的・系統的な理解が可能になるように編成しており、2024年度入学生からは、どの学生も習得すべき内容や技能が含まれる科目として基盤科目を設置し、卒業した者には、学士(教育学)を授与している。

また、本学園は認定こども園(幼稚園型)・高等学校・短期大学・大学を擁する総合学園であり、平成21(2009)年度の子ども育成学部開設と同時に、幼稚園・小学校教員養成課程を発足させて以来、教育実習やボランティア活動、キャリア支援等をはじめ、ニーズに応じた多様な学外での活動を推進し、地域の学校や施設、各機関とも連携した教員養成に努めている。

## II 基準領域ごとの教職課程自己点検・評価

### 基準領域Ⅰ 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み

#### 基準項目Ⅰ-Ⅰ 教職課程教育の目的・目標の共有

##### 〔現状〕

全学的には、認定課程設置の趣旨等に基づき、教職課程運営を行っている。子ども育成学部では、「卒業認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)」及び「教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)」を踏まえて教育目的・目標を定め、幼稚園及び小学校教員養成課程の科目を体系的に開講し、計画的な指導を行っている。小学校の教職課程では教科の指導法の一部を2年次からスタートし、教員採用試験の3年次選考に対応できるよう準備を進めた。幼稚園の教職課程については2025年度入学生より、1年前期から一部の演習をスタートさせた。また、全学共通のキー・コンピテンシーとして「コミュニケーション力」「協働力」「課題解決力」の3つを挙げ、子ども育成学部はこれに「人間理解力」「教育支援力」の2つを加えており、教職課程においても各授業科目でどの能力を伸ばすかをシラバスで明示し付けたい力として学生及び教員の共通理解を図っている。

また、学生は1年後期からLMS(ラーニングマネジメントシステム)で管理している教職履修カルテで授業の概要を確認し、期ごとの学びを振り返り、アカデミックアドバイザーであるゼミ担当教員と面談し、改善点や課題を明らかにして進めてきた。また、ゼミ担当教員が変われば同カルテを引き継ぎ、指導の連続性を図っている。

##### 〔優れた取組〕

期ごとのオリエンテーションや各学年ガイダンスで年次ごとの目標を学生に周知し、「教職論」や「教育実習指導」の授業の中で、教職課程の目的・目標の共有を図っている。なお、幼稚園・小学校の教育実習では、担当教員が実習校へ実習生の状況確認を行い、必要に応じて適切な助言を行っている。さらに連絡票を記入して本学の実習担当教員と共通理解を図り、協働して人材育成に取り組んでいる。

##### 〔改善の方向性・課題〕

大学としての目指す人材像をもとに、変化の激しい時代にあって将来のあるべき姿を模索し、時代に応じた小学校教諭、幼稚園・保育教諭の目指す人材像を、より明確にかつあらゆる機会に教職員及び学生に対して周知し、共通理解を図り一丸となって取り組む必要がある。

特に今まで複数資格の取得のために、学生も教職員も時間的に無理がかかっていた学部設立当時の体制を維持してきたが、高い分野の専門性を求める時代となり、2年次からのコース化に向

けて計画を立て取り組むこととなった。2024年度は、カリキュラムツリーを基にした開講年次を中心とした変更を行った。2025年度入学生が2年次に進級した2026年度より実施できるように準備を進めてきたが、望ましい教育課程の実施となるよう、指導者と学生双方からの評価をもとに改善の方向を確かめられるようなチェック機能を保障していく必要がある。幼稚園の教職課程についても2025年度入学生より、1年前期から一部の演習をスタートさせた。

このように学年ごとの科目配置の不均衡に対し大幅な是正を行うとともに、学生のニーズと社会の情勢が大きく変化した現状を踏まえ、主と副の免許資格の取得をベースに2026年度の学生募集の段階からのコース化を目指す。2年次以降「学校教育分野」「保育・幼児教育分野」「社会福祉分野」の3つのコースから、学生がなりたい自分を思い描き、バランスの良い履修ができるようにする。

## 基準項目1-2 教職課程に関する組織的工夫

### 〔現状〕

教育職員免許法や教職課程認定基準等の改正に関する情報に加え、「こども性暴力防止法」など喫緊の教育課題について全学一斉メールにて教職員全員で共有し、学生に対して確実に指導するとともに、関係する授業を確かめシラバスに明確に位置付けるなど改善に努めている。また、FD・SDの一環として、教職課程委員及び教職事務担当者が学外の研究会や勉強会などに定期的に参加して、教職課程に関する最新の動向などの情報を得て、教職課程の質の保証、向上に取り組んでいる。

### 〔優れた取組〕

全学的には、大学教育の質の向上を不断に図るために、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーの3つのポリシーに基づきながら、機関レベル(大学)、教育課程レベル(学部・学科)、科目レベル、個人レベルの各段階で学生の学修成果を的確に把握・測定することとなり、教職課程の科目においても、公平で客観的かつ厳格な成績評価を目指して、ルーブリック評価を導入し、その有効活用について実践的検証を行っている。

### 〔改善の方向性・課題〕

従来、教職課程については、教員免許状を授与するための課程であることから、教職課程及び教員組織を点検する全学的な組織として整備した。個別の授業内容を点検・改善できるような体制・仕組みをより一層充実できるよう教職課程を有する子ども育成学部の教員で構成された教職課程委員会を中心に履修状況や進路状況に照らして自己点検の取り組みを進めてきた。全学組織としての評価については教職課程委員会において、また教職課程の実施に関しては学部の小学校教職課程部会と幼稚園教職課程部会で対応している。令和5(2023)年度より、中核となるセンター的機能の必要性から「教職課程実践研究センター」を設けた。全学組織としての教職課程

委員会を補完し、教育の質を高めるための全学的な議論と共通理解の場としての教職課程委員会の機能を十分に発揮できるよう組織の運営を改善することが求められる。令和6年度は事務を補助する職が配置され、教育実習等の事務の効率化を図ったが、次年度以降は業務を優先度の視点から精査し、現有の人材でも機能できるように取り組みたい。

また、ルーブリック評価については、教員のフィードバックによる日常的な学習支援への効果的な活用の仕方を考え、学びの質を高めていく必要がある。ICTの活用や授業改善、他学部の専門教員による AI に関するFDについても積極的に実施するなど、教職課程の授業に向けた研修内容を明らかにして実施していく。

<根拠となる資料・データ等>

・情報公開（設置の趣旨）

[https://www.tuins.ac.jp/common/docs/about/child\\_purpose.pdf](https://www.tuins.ac.jp/common/docs/about/child_purpose.pdf)

・情報公開（富山国際大学学則:学部の目的）

<https://www.tuins.ac.jp/wp-content/uploads/2023/04/31fb4ad56cfb72070b0faaa26ec8a71d.pdf>

・情報公開（富山国際大学 開学 30 周年記念誌:3-2 教育方針、特色 3-3 教育活動）

<https://www.tuins.ac.jp/wp-content/uploads/2021/04/tuins-30th-anniversary-magazine.pdf>

・子ども育成学部教育課程表（2025 入学生）

[https://www.tuins.ac.jp/about/disclosure/syllabus\\_child\\_2025/](https://www.tuins.ac.jp/about/disclosure/syllabus_child_2025/)

## 基準領域2 学生の確保・育成・キャリア支援

### 基準項目2-1 教職を担うべき適切な学生の確保・育成

#### 〔現状〕

本学の HP や、入試広報時に活用する大学案内に子ども育成学部の求める人材像（アドミッションポリシー）を明記するとともに、進学説明会にて高校の教員や生徒への積極的な周知を図っている。また、オープンキャンパスでの模擬授業を通して、教職への意識を高めるよう努めている。さらに、新入生オリエンテーションや各学年のガイダンスにおいて、教職課程履修上の心構えや履修計画の作成について説明し、将来教師になるという目標が明確になるようにしている。目標を立てた継続的な学修により、安定した教員採用の実績を積み重ねている。そのため、高校側からの信頼も得ることができ、小学校教員を目指す学生が入学するといったサイクルがうまれてきた。

#### 〔優れた取組〕

幼稚園・認定こども園及び小学校における教育実習の履修要件を設けて期ごとに周知し、学生

の成績状況を確認し、必要に応じて指導している。令和6(2024)年度からは、(5)成績評価についてGPAの基準を導入した。原則として次の各号のいずれかに該当する者は実習履修を延期または中止となる旨を周知している。

- (1) 心身ともに実習に耐えうる健康状態であること。
- (2) 事前指導において無断欠席が無いこと。
- (3) 日頃の学生生活態度において、実習に著しい支障をきたすと考えられることがないこと。
- (4) 実習実施時期直前の期の履修科目において、成績評価が「F」の科目及び受験資格喪失科目の合計が5科目以内であること。
- (5) 実習実施時期直前の期までのすべての履修科目において、GPA2.3以上であること。

また、実習の要件に抵触する前兆を捉えるための、科目担当者からゼミ担当教員への欠席連絡(3回欠席以降)の徹底や、Formsを利用した欠席届のチェックが改善された。さらに早期の対応ができるようにしたい。

#### [改善の方向性・課題]

特に小学校教育実習への学生の参加意欲は非常に高く、実習履修要件について浸透しつつある。また、上記のいずれかの号に抵触した学生については、実習担当者による面談を適時に行うなど、きめ細やかに指導し、実習への意欲を高めている。県教育委員会の事業(観察実験アシスタント、英語学習パートナー、日本語指導支援員)等の活動へ積極的に参加する学生も多く、教職に必要な資質・能力を身に付けようとする雰囲気がある。幼稚園教育実習指導では実習先での事前の自主研修を取り入れ、効果的な実習につなげるよう努めている。

キャリア支援に関しては、1年次の経験を基に2年次に進級した段階で具体的なキャリアの方向を決められるよう指導を行っている。その結果、単に複数資格の取得を目指す学生は減り、3年次後半まで進路が定まらずに悩む学生は少なくなっている。今後もできるだけ早い段階で進路を決定できるよう支援し、教職を選択する学生には高い意識と専門性を身に付けさせたい。

## 基準項目2-2 教職へのキャリア支援

#### [現状]

入学時からPCを必携とし、あらゆる場面でキャリア形成の一環として活用するよう指導している。呉羽キャンパスのどこにいても、協働学習や個別最適な学びに対応するために、情報センターが学内Wi-Fi等の増設等、無線LANのネットワーク整備を段階的に行っている。

キャリア支援センターによる教職への支援としては、キャリア支援センターやキャリア支援講座担当教員による教員採用試験対策講座、面接指導、小論文指導、模擬授業を実施している。また、卒業生全員に対する卒業時アンケートを実施し、教職課程を含めたキャリア支援の評価や改善等

に活用している。

さらに、富山県の教育委員会の人事担当者による説明会を行い、採用試験や講師登録等に関する情報を周知している。キャリア支援講座では、教職に就いた卒業生の講話を聴く機会を設けたり、富山県の寄附講義を利用して教員養成に資する著名な講師を招聘したりして研修会を開くなど教員としての資質向上を図った。学外活動としては、小学校や幼稚園・認定こども園でのインターンシップを推進してきた。特に1年生は、水曜日を学外活動の日と位置づけ、具体的なキャリア支援としての体験活動が行うことができるように時間割編成を工夫した。令和4年度からは新規の事業として、大学近隣の小学校との連携を強化することを目的とした地域連携校構想を立て、小学校でのクラブ活動ボランティアを開始した。令和6年度に続き7年度も70名を超える1年生の参加希望があり、活発な活動が展開され、小学校から高く評価される取り組みとなっている。

幼稚園・保育教諭の人材確保やキャリア支援については、質の高い保育者養成の観点から、例年開催される富山県主催の保育士養成・確保に関する意見交換会において、県内の保育関係団体・養成校、行政との意見交換の結果、2023（令和5）年度から、保育現場の研修会に学生も参加する取り組みを行っている。学内では、2024年度より、早期からキャリア意識を高めるため、呉羽キャンパス内の付属みどり野幼稚園の協力を得て、1年生の授業を活用し、46名が保育見学を行った。また、4年次のキャリア支援講座Ⅲでは、保育現場での研修を取り入れた。

教職履修カルテについては電子化を図り、web上で学生と指導教員がいつでも確認できる双方向性を考慮したシステムに移行した。教職履修カルテは本来、教員養成課程の最終段階における教職履修学生の学修の質保障を意図して導入されたものであるが、履修状況の確認にとどまらず、教職に対する学生の学修への意識向上につながるように活用する途上にある。

#### 〔優れた取組〕

2025年度は、小学校教員を目指した学生は32名で、富山県の採用が27名（内1名は採用延期の措置をいただき大学院へ進学）、新潟県1名、東京都1名の現役合格であった。富山県内においては一定数の教員数を確保することとなり、これは学生と教職員が一体となった丁寧なキャリア支援の成果であると考えられる。県内を中心に教員を志望する学生の獲得にさらに力を入れ、小学校教員の質の向上と将来を見据えた「学び続ける教師」の育成に取り組みたい。

一方、公立の保育職採用試験では、令和7（2025）年度の正規合格者が10名（受験者12名）、自治体の求人が「若干名」と少ない中、健闘している。（富山市7名、射水市2名、小矢部市1名）。保育職に占める公立保育者の割合は約42%となっている。近年は、初任給が公立よりも高く、園の魅力をHPやアプリで常に発信し、ICTを早くから導入している民間園を第一希望とする学生も多い傾向にある。

#### 〔改善の方向性・課題〕

小学校分野の授業「キャリア支援講座」に関しては、単位数に準じた大幅なシラバス内容の見直しを行い、学生のニーズに応えるとともに教職員の負担の軽減にも努めてきた。

令和5(2023)年度からは、富山県の教員採用試験において3年生受験が可能となり、3年次開講の「キャリア支援講座Ⅱ」の内容を大幅に変更した。その結果、3年次では20名の学生が1次試験に合格し、4年次での2次試験に臨む権利を得た。さらに一人一人のニーズに応じた個別の支援を進め、夢の実現に向けて共に取り組みたい。

心身や学習面に特別な配慮を必要とする学生については、ゼミ担当教員との連携が必須であるが、教育実習や介護等体験を実施する際の組織的な支援体制を今後さらに構築していく必要がある。適性などの関係で学生の進路変更は可能だが、教職履修や教員就職への意欲を高めるためにキャリア支援センターと情報交換し、指導の工夫を重ねていきたい。

<根拠となる資料・データ等>

・情報公開(2025年度入学生用学生便覧:7-2. 富山国際大学子ども育成学部子ども育成学科教職課程に関する履修規程)

[https://www.tuins.ac.jp/wp-content/uploads/2025/05/handbook\\_2025.pdf](https://www.tuins.ac.jp/wp-content/uploads/2025/05/handbook_2025.pdf)

・情報公開(学部の求める人材像:アドミッションポリシー)

<https://www.tuins.ac.jp/academics/child/>

### 基準領域3 適切な教職課程カリキュラム

#### 基準項目3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施

[現状]

理論と実践の往還による、より質の高い教員養成のため、1年次から教育現場に出られるように、また、専門性を高められるカリキュラムとなるように授業改善に取り組み、教職課程の再編統合や時間割編成の工夫を行っている。半日や一日、まとまった時間を確保できるようにすることで、座学だけではなく体験を重視した学生の主体的・対話的で深い学びに根差した教職課程の授業を行い、学生が高い実践力を身に付けることができるよう取り組んでいる。

また、学校現場の情報化に向けていち早く対応してきた。時代を見据えた情報に関する教育プログラムとして令和3(2021)年度には、「数理・データサイエンス・AIリテラシー教育プログラム」を大学全体として開始した。令和4(2022)年度入学生からは、教養科目において卒業必修科目である「情報処理演習」を実施した。加えて、令和5(2023)年度入学生からは教養科目「人間と情報」を変更し、DXやAIの活用にあわせて内容を広げた科目として「情報リテラシー」(1年次卒業必修)として開設した。また、「情報リテラシー」を卒業必修科目とし、学部生全員が「数理・データサイエンス・AIリテラシー教育プログラム」リテラシーコースの認定を受けられることとなった。

令和4(2022)年度入学生からは、「教育とICT」(2年次開講)を開設し、小学校の情報通信技術を活用した教育の理論及び方法の必修科目として、また、幼稚園の教育の方法及び技術(情

報機器及び教材の活用を含む。)の選択科目として実施した。

〔優れた取組〕

「教育とICT」については、地域の小学校と同じICT環境を整備することを目標にタブレット端末を導入し、小学校現場での効果的な活用について実際のアプリケーション等を操作しながらICTの活用について実践的に学んでいる。また、理科教育法等ではデジタル教科書を活用した授業を実施し、指導案の作成や模擬授業等において動画コンテンツの活用など有効に活用している。幼稚園の教職課程では、直接体験が重要視される幼児期においても、幼児の道具としてのICTについて考え、1、2年次開講の保育内容演習科目等で、情報機器を使用した保育教材の展開の仕方を学んだり、幼児の学びや保育の意図を伝えるための保護者向けのドキュメンテーションを画像データを使用して制作したりしている。教職課程の最終段階である4年次の「教職実践演習」では、保護者向けの動画配信を想定した制作・編集を行っており、保育・幼児教育現場でのICT導入による働き方改革についても学んでいる。

幼稚園の教職課程では、2024年度より、授業においても保育現場と協働して保育者養成を行うことを意識し、実習以外の以下6科目において具体的に取り組んだ。

- (1) 子ども活動実践演習(2年生)  
富山市中央児童館にて、夏祭りを開催。過去最高の利用者となった。
- (2) 子どもと表現(2年生):富山国際学園福祉会西田地方保育園(幼保連携型認定こども園)  
青少年自然の家への遠足、園庭での青空フェスティバルの企画・実践・運営支援を行った。
- (3) 保育内容(造形表現)(3年生):学生が要望する市内の保育・幼児教育施設  
子どもと共に遊びながら活動を抽出し、子ども・保育者と共に、組み立て、準備、実践し、その成果の学習発表会を開催した。
- (4) 保育内容総論 AB(1年生):呉羽キャンパス富山短期大学附属みどり野幼稚園(幼稚園型認定こども園)にて、11/17(月)-12/1(月)、履修者46名全員が4回に分かれて3-5歳児クラスを見学。学生は、子どもが「思っていたよりできる」こと、保育者の関わり、子どもの主体性・協同性、環境構成・自然素材や教材の工夫についての学びが多く、指導案作成や模擬保育に活かした。
- (5) 幼稚園教育実習指導(3年生):同福祉会西田地方保育園  
2024年度から、「保育現場と共に保育者を養成する」とのテーマで、実習指導を保育現場と共に行う取り組みを開始。全員バス移動し、2コマ分の授業(自己紹介後自由遊びの補助等)を実施。オンラインにて現場の先生が事前指導。実践後に自己評価した。学生への事後アンケートでは、保育園での自己紹介の実践が高評価であった。
- (6) キャリア支援講座Ⅲ(4年生):同福祉会西田地方保育園  
11/6(木)、自然保育を実践できる保育者養成のため、県と連携して4年生17名対象に木育・森林環境教育推進事業を行った。5歳児と木で遊ぶことで、木を活用した自然保育への関心が顕著に高まり、場の設定や技術向上、保育現場での実践意欲を強く喚起した。

### [改善の方向性・課題]

大学全体としても情報化社会に対応する教育の在り方については大きな課題の一つであり、特にICTの活用については、DXの推進や生成AIの効果的な活用など早急に対応が迫られる状況となっている。その意味でも「教育とICT」の授業を中心に教科教育法など多様な科目でICTの活用を推進する必要がある。さらに生成AIの効果的な活用など積極的にICTの活用を推進することが求められる状況となってきた。今後も最先端の学びを具体化できるように取り組みを強化したい。

1年次の学外の活動については、小学校のクラブ活動ボランティアの参加など効果的な取り組みが実施されている。しかし、学生のニーズに十分にこたえられていない面もあり、さらなる活動の場の拡大に向けた改善が必要である。

また、実習を含めた教職課程での学びが福井大学連合教職大学院での学びと効果的につながるように、教職課程実践研究センターを設置した。実績を重ねていく中で、学部における教職課程や大学院の運営、卒業生も含めたデータの収集や一括管理を目指すとともに、効果的な教職課程の構築のための職員の配置など人員確保を目指していく必要がある。

「富山に学ぶインターンシップ」(3年次通年)は、キャリア形成にもつながる科目であるが、小学校教員を目指す学生は例年、公立学校教員採用選考検査の合格発表を受けた4年次に履修する傾向がある。保育・幼児教育分野の学生は、4年次には各自の就職活動があるため、動きやすい3年次に履修を推進してきたが、履修者数が例年少なく、2025年度の履修者は0名であった。これは、保育者を目指す学生に3資格免許取得を目指す割合が高いため、時間割上、まとまった時間がないこと、また、保育現場の人手不足によるアルバイト学生の増加が考えられる。質の高い保育・教育者を養成するには、就業体験の効果の整理、自主研修との差別化、時間割上の時間確保、必修・選択の別も含めた検討が必要だったため、これまで80時間以上で2単位としていたが、2026年度からは、60時間以上で2単位として指導を進める。

## 基準項目3-2 実践的指導力育成と地域との連携

### [現状]

1年次には授業「地域社会参加活動」(卒業必修)において、教育・保育・社会福祉分野でのボランティア活動を通して、必要条件を満たした活動を単位認定している。また、教職課程の科目での授業外の学びとして、小学校の公開授業や研究会参加など、学外での研修を課している。

幼稚園の教職課程では、授業外で保育サポーターの取り組みを行っている。

#### (1) 呉羽キャンパス内富山短期大学みどり野幼稚園での活動

これまでは2年生以上の参加であったが、これまでの実績の積み重ね等もあり、学年は問わず、是非とも大学生の力を借りたいとのことで、2025年度は1年生から参加。1~4年生の保育サポーター希望者が登録し、保育者から依頼を受けた保育補助や教材づくりを行っている。2025年度実績(延べ人数)として、前期は2年生7名、3年生15名、4年生2名、後

期は1年生3名、3年生2名が、単発もしくは継続して実践した。幼稚園がキャンパス内にあるため、空きコマを利用。富山短期大学の学生の実習先でもあるため、調整しながら実施。

## (2)「保育サークルにこここ」での活動と今後について

2～4年生が所属。富山国際学園福祉にながわ・西田地方保育園の保育サポーターに加え、他園での保育サポーターやボランティア(保育施設・福祉施設等での活動、子ども等に関わるイベント協力など)の活動を実施。2025年度の活動実績(延べ人数)として、前期3年生12名、4年生22名(学園福祉会)、後期3年生9名、4年生1名(フクシのまちづくりフォーラム in やつお)、学園福祉会以外の保育園へは7名が単発もしくは継続して実践した。

今後も様々な活動の形を検討していく。

小学校分野では富山県教育委員会の事業との連携も多く、観察実験アシスタントや英語学習パートナー、外国人支援スタッフの事業には多数の学生が参加している。特に観察実験アシスタントは例年多くの学生が県内の小学校や中学校で活動しており、1年次で参加した以降も継続して参加する学生も見られる。こうした活動では実践的指導力の育成と学部と学校の信頼を高めるとともに、学びの機会をつなぐ役割を果たしている。また、英語学習パートナーでの学生の真摯な取り組みは学校や地域から高く評価されており、地域の学校への自主的なサポート活動として発展的に取り組む学生も見られる。

## [優れた取組]

上記のように、ボランティア、実習、自主研修、インターンシップ等の学外での学びと、教職課程の講義・演習科目やキャリア支援を効果的に結び付けて相乗効果が生まれるような教職課程のあり方を随時検討している。小学校の教職課程では、地域連携校構想のもと自主的に近隣の小学校で活動できる体制を整えつつあり、教育実習だけでなく自主研修も含め、学校や地域に積極的に出て活動する機会を確保し、教職を目指す学生としての高い意識と実践的指導力の育成の両方を高められる点が特色となりつつある。幼稚園の教職課程においては、保育現場と連携し、前掲の保育サポーター、自主研修、卒業研究などを通して、実践を理論として意味づけられる養成、幼児の本質的理解ができる人材育成を目指し、取り組みを広げている。

## [改善の方向性・課題]

本学では、300名を超える小学校教員を輩出する状況となった。複数の卒業生が在籍する小学校も増えてきた。今後は、教員養成から採用後の数年間、どのようにして教師力を向上させていくか、大学の支援が一層求められる。教員養成のための協力校・協力園の新たな開拓、学生・地域・教育現場と一体となった養成教育、現場教員の研修への学生参加、研究的な視点をもって継続的に教育実習の経験を蓄積できる体制づくり、地域課題解決のための県内自治体との共同研究や協議の一層の推進等を検討する必要がある。また、エビデンスを基にした教職課程の見直しのためには、特に、IRセンターによるデータ分析が必要不可欠であり、その結果を具体的な取り組みに移す教職課程実践教育センターの機能を高める必要がある。

保育者養成においては、例年、富山県就職者が9割を超え、認定こども園に保育教諭として採用される卒業生が多い。令和7年度学校基本調査では、幼稚園数が24で2園減少(国立1園、公立6園、私立17園)、幼保連携型認定こども園は137で前年度より1園増であり、県全体の保育・幼児教育施設の4割を超える。教育・保育の知識・技術を兼ね備えた保育教諭を養成する必要があるため、以下の点についても検討していく。

(1) 保育現場以外の公共施設の教育利用

2024年度の課題であったが、授業「子ども活動実践演習(2年生)」にて、富山市中央児童館と連携し、地域も視野に入れた行事を経験することができた。今後も模索していく。

(2) 認定こども園・幼稚園でのアルバイトについて

最近は人手不足のため、アルバイト募集が大変多く、実際にアルバイト学生が増えている。今後も引き続きアルバイトでの経験も含めた保育者養成を考えていく必要がある。

<根拠となる資料・データ等>

・情報公開(富山国際大学 開学30周年記念誌:3-6 今後に向けて)

[https://www.tuins.ac.jp/wp-content/uploads/2021/07/tuins\\_30th\\_anniversary\\_magazine.pdf](https://www.tuins.ac.jp/wp-content/uploads/2021/07/tuins_30th_anniversary_magazine.pdf)

・子ども育成学部 授業アンケート 各学期推移グラフ

[https://www.tuins.ac.jp/wp-content/uploads/2025/08/class\\_survey\\_fchild.pdf](https://www.tuins.ac.jp/wp-content/uploads/2025/08/class_survey_fchild.pdf)

### Ⅲ 総合評価(全体を通じた自己評価)

本学の教職課程について、以上3つの視点から自己点検・評価を実施した結果、幼稚園・小学校いずれの教員養成課程についても、教員の創意工夫によって、厳しい制約の多い中でも、教職課程の教育の質保障と向上に向けての改善を進めてきた。

小学校教諭の養成に関しては、特にキャリア支援やICTの活用など、進んだ取り組みの実践を通して学生の教職に対する高い意識や教職への強い希望を引き出すことができた。その結果、子ども育成学部子ども育成学科には、教職に関心のある学生が多く在籍し、小学校教員養成においては、毎年度の教員採用試験に多くの学生が合格し、本学部の出身者が富山県の小学校の新採教員の30%近くを占める状況となった。

この背景には教職課程の授業改善に数年前から着手し、座学だけではなく主体的・対話的で深い学びにつながるディスカッションやグループワークを積極的に取り入れた教科教育を進めてきたことや実践的指導力の育成として、地域での学童保育などのボランティア活動や観察実験アシスタント等の活動など、教育現場での経験を積む機会を増やしたことが要因として考えている。

また、現場経験は学生の教職への意識を高めるとともに小学校教員を仕事とすることへの不安を取り除き、自信となっていると考える。この実績は、教員養成に向けた工夫を重ね、一人一人の学

生に寄り添い、教育現場に足を運んでそのニーズに応える取り組みの成果である。ただし合格者の数や実績に胡坐をかくのではなく、愚直にかつ実践的に教育現場に喰い込み、体験を通して学ぶことを忘れてはならない。そのためにも実践的指導力を重視し、体験活動を通して、子どもを理解し、子どもの学びを支え、主体的に教育活動に取り組む質の高い教員養成を発展的かつ継続的に進めることが重要である。

幼稚園教諭の養成に関しては、希望者が就職数に結びつくよう、これまでの保育現場での積極的な調査研究に加え、2024年度からは養成のための保育現場との連携協力を強力に進めており、今後も質の高い保育者養成に向けての計画と実践が求められる。今後も真摯な取り組みを続け、教職課程全般について計画的に対策を練り、対応を早期に進めていきたい。

学生募集については、急速な少子化に伴い、今後は確保が困難な状況となっていく恐れがあることを予測し、2024年度より、学部のブランディングやSNSによる情報発信、高校生に教員の仕事を紹介する企画など、積極的に取り組みを進め、安定した定員確保に努めてきた。今後の発展を考えると、教職に就きたいという高校生の募集や獲得に関して、情報発信も含め取り組みがまだ不十分である。特に学生募集に関して、教職課程を目指す高校生の開拓に向けてIRセンターと連携し、正しい情報とその分析をもとにした学生募集を行い、教職に対するマイナスイメージを払拭し、一生の職業として取り組む価値のある仕事であることを積極的に知らせる取り組みが必要である。

また、本学部では、幼・小の両免許状を取得する学生も多いことから、幼・小、小・中、中・高といった学校段階間の円滑な接続を見通した養成教育を行い、幼児期の学びを踏まえた授業の展開ができる幼小接続に強い人材の育成にも引き続き取り組んでいきたい。

さらに、現場で活躍する本学の卒業生に学ぶ機会を作ることも含め、卒業生のサポート体制の充実も必要となる。地域の信頼を得ることができた今、その信頼をさらに高め、大学の中核として教職課程のさらなる充実を図る努力を続けたい。

#### IV 教職課程自己点検評価報告書作成プロセス

令和8年3月30日 教職課程委員会にて情報共有及び報告

令和8年5月中 小学校教職課程部会、幼稚園教職課程部会にて審議

令和8年6月10日 両学部合同教授会・運営会議での審議

令和8年6月下旬 報告書を一般社団法人全国私立大学教職課程協会に提出・HP掲載

作成委員 幼稚園教職課程部会(5名) 小学校教職課程部会(7名)

キャリア支援担当者(1名)、総合学務センター長、次長

以上